

## 9. 大分県の10年ぶりの高病原性鳥インフルエンザの発生と 経営再開に向けた取り組み、防疫措置の課題

豊後大野家畜保健衛生所、1) 大分家畜保健衛生所、2) 畜産研究部

○ (病鑑) 河上友、汐月貴紀、丸山信明、(病鑑) 堀浩司、  
病鑑 平松香菜恵<sup>1)</sup>、加藤洋平<sup>2)</sup>

【はじめに】2020年11月から2021年3月にかけて、18県52事例の高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)が発生。本県でもおよそ10年ぶり3度目のHPAIが発生し、防疫措置を実施。その後、HPAI発生農場で県内初の経営再開に至ったので、概要を報告。

【発生の概要】2020年12月9日、42日齢の肉用鶏で死亡羽数が増加(6日より7、8、12、33羽で推移、過去21日間の平均死亡羽数8羽)し、立入り。死亡鶏11羽及び生鶏2羽についてA型インフルエンザ簡易キットを用いた検査を行い、死亡鶏1羽で陽性を確認。確認のため死亡鶏5羽を追加検査し、3羽で陽性を確認。12月10日、大分家畜保健衛生所でのPCR検査で死亡鶏10羽についてH5亜型に特異的な遺伝子が検出され、5時30分、動物衛生課との協議で鳥インフルエンザの疑似患畜と決定。11日21時、動物衛生研究部門でのHA開裂領域の遺伝子解析により、HPAI(H5N8亜型)の患畜と確定。なお、抗体検査では簡易検査実施2羽及び同居鶏12羽について抗体陰性。

【防疫措置】12月10日7時、県総合対策本部会議で殺処分命令。発生1農場(B農場13,087羽)及び近隣の疫学関連2農場(C農場25,700羽、D農場14,735羽)の防疫措置を開始。集会場、2クリーンゾーン(CZ)を設営。5クール延べ832名の動員。鶏及び汚染物品は埋却。B農場は約14時間30分、C農場は約20時間、D農場は約11時間20分でと殺及び農場消毒を完了。12月11日23時11分の埋却完了をもって、疑似患畜決定から約42時間で3農場の防疫措置を完了。12月18日及び25日に農場消毒。

【経営再開に向けた取組】①環境検査:1月6日、HPAI発生時空舎であったA農場も含め、4農場5棟で36検体のウイルス検査用の採材を実施し、全ての検体について陰性を確認。②飼養衛生管理の改善:HPAI発生時、下記の飼養衛生管理基準の項目を不遵守。車両等の消毒実施未記録。鶏舎内外の動線が交差。鶏舎周囲の環境未整備。鶏舎に複数箇所の破損。1月22日、上記について改善を確認。③モニター家きんの導入:2月9日、4農場5棟に計155羽を導入。14日間飼養し、23日に血清149検体並びに気管及びクロアカスワブ30検体をウイルス検査用として採材。3月1日、全ての検体について陰性を確認。19日より鶏を導入。5月10日より経営再開後、初の出荷を開始。

【まとめと考察】今回、早期通報によりHPAIを早期発見。1農場当たり24時間以内のと殺と72時間以内の埋却により、ウイルスのまん延を防止。その後、農場は約3カ月と早い期間で経営再開に至り、順調に出荷。しかしながら防疫措置の過程で多くの課題が発生。関係機関と農場やCZの情報を事前共有できておらず、防疫措置計画に支障。3農場一斉の防疫措置のため、当該家保の備蓄資材(採卵鶏1万羽規模1農場分)を集会場・2CZ・3農場に分配し、資材が不足。県ガイドライン通りの連絡体制を築けず、情報が錯綜し現場が混乱等。これらの課題解決のため、初動防疫事前計画書の更なる整備、備蓄資材の増強、県ガイドラインの改正等の対策と、2021年10月の県防疫演習での実働演習による検証を実施。今後の迅速かつ円滑な防疫措置に繋げたい。